イーハトーボ農学校の春

太陽マヂックのうたはもう青ぞらいっぱい、ひっきりなしにごうごうごうごう鳴ってゐます。

（ゴーシュ　ほしがさいへんにひゃく）

わたしたちは黄いろの実習服を着て、くづれかかった煉瓦の肥溜のとこへあつまりました。冬中いつも唇が青ざめて、がたがたふるへてゐた阿部時夫などが、今日はまるでいきいきした顔いろになってにかにかにかにか笑ってゐます。ほんたうに阿部時夫なら、冬の間からだが悪かったのではなくて、シャツを一枚しかもってゐなかったのです。それにせいが高いので、教室でもいちばん火に遠いこはれた戸のすきまから風のひうひう入って来る北東の隅だったのです。

けれども今日は、こんなにそらがまっ青で、見てゐるとまるでわくわくするやう、かれくさも桑ばやしの黄いろの芽もまばゆいくらゐです。おまけに地殻小屋の裏の二きれの雪は立派に光ってゐますし、それにちかくの空ではひばりがまるで砂糖水のやうにふるへて、すきとほった空気いっぱいやってゐるのです。もう誰だって胸中からもくもく湧いてくるうれしさに笑ひ出さないでゐられるでせうか。さうでなければ無理に口を横に大きくしたり、わざと顔をしかめたりしてそれをごまかしてゐるのです。

（コロナは六十三万二百）

（ゴーシュ　あゝきれいだ）

あゝきれいだ、まるでまっ赤な花火のやうだよ。

それはリシウムの紅焔でせう。ほんたうに光炎菩提太陽マヂックの歌はそらにも地面にもちからいっぱい、日光の小さな小さな薔薇や橙や赤の波といっしょに一生けん命に鳴ってゐます。カイロ男爵だって早く上等の絹のフロックを着て明るいとこへ飛びだすがいいでせう。楊の木の中でも柳の木でも、またかれくさの地下茎でも、月光いろの甘い樹液がちらちらゆれだし、早い菫草やつめくさの芽にはもう黄金いろの小さな澱粉の粒がつうつう浮いたり沈んだりしてゐます。

（ゴーシュ　ぐるぐるぐる